【仮面ライダー】ハヤテのごとく！～俺、参上！～【電王】

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【仮面ライダー】ハヤテのごとく！～俺、参上！～【電王】

【Ｎコード】

Ｎ９６６４Ｅ

【作者名】

桂　ヒナギク

【あらすじ】

ついに電王にまで手を出してしまったハヤテのごとく！是非、お読み下さい。

（前書き）

オープニングテーマ：Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐ

エンディングテーマ：七転八起☆至上主義！

キャスト

主演：ハヤテ　＆　ヒナギク

マリア

西沢　歩

綾崎　心（ヒナアフターより友情出演）

スーツアクター

仮面ライダー電王・プラットフォーム：ヒナギク

仮面ライダー電王・ソードフォーム：ヒナギク

モモタロス：ヒナギク

ウラタロス：ハヤテ

クラストイマジン：マリア

ボイスアクター

仮面ライダー電王・プラットフォーム：ヒナギク

仮面ライダー電王・ソードフォーム／モモタロス：関　俊彦

ウラタロス：遊佐　浩二

クラストイマジン：？？？

撮影
カメラマン：橘（たちばなわたる）亘

撮影協力
三千院家の皆さん

３ＤＣＧ
橘　亘

脚本：ナギ

製作：桂　ヒナギク

２００Ｘ年、７月某日。
その日は、雲一つ無い晴天で、気温は３０度を超えていた。
そんな状況の中、桃色長髪の少女が、全身から汗をだくだくと流しながら、負け犬公園のランニングコースを走っていた。
「はあ……、はあ……、もうダメ……」
頭に金の髪留めを付けたその少女は、そう言うとその場に倒れた。
そこへ、ふわふわと黄色い光りの球が飛んできて、少女の中に入り込んだ。すると、少女の前に鬼の虚像が出現して言った。
「お前の願いを言え。どんな願いでも叶えてやる。お前が払う代償はたった一つ……」
「何かしら……、暑くて幻覚が見えるわ……」
少女の言葉に鬼の虚像は、「ダメだこりゃ」と姿を消した。
「はあ……、はあ……、何かしら、これ？」
少女は目の前に落ちている黒いカード入れのようなものを拾った。
「誰かの落し物ね。交番に届けなくちゃ」
しかし、少女は暑くて一歩も動けなかった。
「あぢー」
そこに、偶々通り掛かった水色頭の少年、綾崎（あやさき）　颯（ハヤテ）が少女に声を掛けた。
「大丈夫ですか、ヒナギクさん？」
桂（かつら）　雛菊（ヒナギク）という少女は、その問いに答える。
「これが大丈夫に見える？　て言うかもう限界、水ちょうだい……」
ハヤテは飲み掛けの烏龍茶を見ると言った。
「飲み掛けですけど、よければどうぞ」
「有り難う」
ヒナギクは何とか起き上がると、差し出されたお茶缶に手を伸ばし、飲み口に唇を当て、口内に烏龍茶を流し込む。

お茶を飲み干したヒナギクは、空の缶をハヤテに渡した。
「助かったわ」
そう言って立ち上がるヒナギク。
「それにしても今日は暑いわね」
「ですね。ていうか、どうしてこんな時にランニングを？」
「走りたかったのよ。悪い？」
「いや、別に悪いって訳じゃないですけど、せめてそれなりの準備をしてからにしないと。もし僕が通り掛からなかったら、きっと脱水症状で死んでましたよ」
「そうかもね。地獄に居る鬼の幻覚が見えたぐらいだから」
ヒナギクがそう言うと、先程の鬼が地面から出現した。
「そいつは幻覚じゃねえぜ」
「……」
無言で鬼を見詰めるヒナギク。
「まあいいや。取り敢えず、お前の願いを言え」
「1億5千6百80万4千円の借金をお嬢様に返すことです」
ハヤテが言うと、鬼は怒鳴った。
「お前のなんか聞いてねえよ！」
「それじゃあ……」
ヒナギクに顔を向けるハヤテ。
「ああ、その桃色姉ちゃんだ」
「ハヤテくん、何か幻覚が見えるんだけど」
「僕も幻視と幻聴が」
「幻じゃねえ！　俺は憑依した人間のイメージで現出したイマジンだ！」
「「暇人？」」
ヒナギクとハヤテの二人が同時に訊く。
「暇人じゃねえ！　イマジンだ！　しん○すけみたいなボケすんな！」
イマジンという鬼がそう言うと、二人は無視して去ろうとした。

「おい、待てよ。まだ願い聞いて――」
ヒナギクの前に回り込み、そこまで言ったところで、イマジンは彼女に踏み潰された。
「あら、何か踏んだわ」
そう言ってヒナギクが足下を見ると、白い砂が大量に落ちていた。
足を退けると、その砂が先程のイマジンに姿を変えた。
「……！？」
驚くヒナギク。
「おい、驚いてる暇があったらさっさと願いを言え！」
「消えて」
「いいだろう、その望み……って、叶えられるか――っ！」
「じゃあどんな願いならいい訳？」
その問いに、イマジンは腕を組みながら唸った。
「と言っても今の私に叶えて欲しいことなんてないけどね。それに、夢は自分で叶えなくちゃ」
そうよね？――とハヤテの顔を見るヒナギク。
「そうですね。でも、頼んだだけで叶えられるってのもいいものですよ。だって、僕は凡そ４０年掛けないと、お嬢様に借金を返済出来ませんから」
「成る程。じゃあ、お願いしてみようかしら」
ヒナギクがそう言ったとき、目の前に線路が出現し、列車が音楽を鳴らしながらやって来てドアが開いた。そして、中から水色長髪の少女が出て来て言った。
「望みを言ったらダメだ」
「誰よ、あなた？」
「心（こころ）だ。それより、この辺りで黒いカード入れみたいなの見掛けなかったか？」
その問いに、ヒナギクは先程拾ったものを取り出す。
「それってこれの事？」
「ああ、それだ。拾ってくれたんだな」

心という少女がヒナギクからカード入れのようなものを取ろうとすると、ひょいと避けられた。
「これがあなたのだという証拠はあるの？」
「ある。だが言えない」
「それじゃあ渡せないわね」
ヒナギクはそう言うと、くるりと百八十度回転して去っていく。
「待て、俎板！」
その言葉にムカッとしたヒナギクは、立ち止まって額に青筋を立てて振り向いた。
「あなたには言われたくないわよ！」
ヒナギクは心の胸元を指差しながら怒鳴った。すると、心が服を脱いで胸に巻かれている曝しを見せた。
「悪いがお前よりあるぞ」
心がそう言って曝しを外すと、おっぱいがボインッと膨らんだ。
「……！？」
ハヤテは驚いて顔を赤く染めた。
「あの、柔らかいんですか、それ？」
そう言ってハヤテが心の胸に手を伸ばそうとすると、ヒナギクが顔面を殴った。
「あっち向いてなさい！」
「は、はい！」
ハヤテはそう返事をすると、心の胸を見ないように後ろを向いた。
「ちょっとあなた、触らせなさい」
ヒナギクはそう言って、心の巨乳を掴んだ。
「うっ……！」
心が顔を引き攣らせる。
「どうやら本物みたいね」
ヒナギクは巨乳を放した。
心は曝しを巻いて服を着ると、手を差し出した。
「返してくれないか？」

「嫌だ」
「どうして！？」
「あなたが巨乳だから」
「自分が貧乳だからってひがんでるのか？　ていうか返せよ！」
心が正拳突きを繰り出してヒナギクを吹っ飛ばした。すると、イマジンがヒナギクの体に飛び込んだ。その瞬間、瞳が赤く染まり、ピンクの髪に赤いメッシュが入った。
「おいおい、困るんだよな。俺の契約者にこんなことされちゃ」
ヒナギクは立ち上がると、そう言いながら心を睨み付けた。
「知るかよ。ていうかその体から出ろ」
「こいつは俺の体だ。俺が俺のものをどうしようとお前には関係ねえだろ」
ヒナギクがそう言った瞬間、容姿が元に戻り、イマジンが体から飛び出した。
「な、何で追い出されたんだ？」
イマジンが疑問符を浮かべると、心が言った。
「特異点だな」
「何、特異点だと！？　巫座戯んな！」
やっと見付けた――と、ヒナギクの両肩に自分の両手を乗せる心。
「あんた、力を貸してくれ」
「は？」
ヒナギクは目を丸くした。
「説明してる時間は無い。もうすぐ此処にイマジンが来る。あんたにはそいつを倒して欲しいんだ」
心がそう言った直後、西沢（にしざわ）　歩（あゆむ）という名の女子高生が現れた。
「ハヤテくんにヒナさん、こんなところで何やってるのかな？」
「来た！」
その瞬間、歩の体から砂が零れ、そこから蟹形のイマジン、クラストイマジンが出現した。それと同時に、歩が気を失って倒れた。
「な、なな、何ですかこの化け物！？」

ハヤテが驚いた顔で、クラストイマジンを指差しながら言った。
「そいつがイマジン。契約した人間の過去に飛び、時間を変えようとする悪い奴だ」
ヒナギクはそれを聞くと、拳をポキポキと鳴らした。
「ちょうど今、ストレスを発散したかったところなのよね」
ヒナギクはそう言うと、目の前のクラストイマジンに襲い掛かった。
「消えてろ！」
クラストイマジンが、肩、手首、胸部から下がった垂れを伸ばしてヒナギクを締め付けた。
「うっ！」
呻き声を上げるヒナギク。
「バカが！　生身の体で勝てる訳が無いだろ！　早く電王に変身しろ！」
「そんなこと言われても、この状況では無理よ」
心の言葉に、そう言い返すヒナギク。
「僕に任せて下さい！」
ハヤテはそう言うと、飛び蹴りを放った。
「イーナー〇ーマ、キーック！」
クラストイマジンはヒナギクを放り投げると、咄嗟に避けた。
「おっと、危ない危ない」
「俎板、今だ！」
その言葉に、ヒナギクがピキッと額に青筋を立てる。
「先ずはあんたからしばいた方が良さそうね……！」
そう言って心を睨め付けるヒナギク。
「まあまあ、少し落ち着きましょう」と、ハヤテがヒナギクを宥める。
「ふんだ。どうせハヤテくんには私の気持ちなんて解らないわよ」
「待って、今ハヤテって言った？」
「言ったわよ」

「マジ？」
心はハヤテの顔を覗き込んだ。
「パパ」
「えっ？」
その単語にハヤテが疑問符を浮かべる。
「ハヤテくん、これはどういうこと？　あなたに娘が居るなんて聞いてないわよ」
「待って下さい、ヒナギクさん。僕に娘なんて居る訳がありません。第一、僕はまだ童貞ですよ？」
「そんなことはどうでもいいから、早く変身しろお袋！」
「お、お袋！？」
ヒナギクが自分を指差しながら訊ねると、心が頷いた。
「ちょっと待って！　私もまだ処女よ！　子どもなんて出来る訳ないわ！」
「だから、そんなのどうでもいいから、早く変身してくれ！」
心はそう叫ぶと、意味もなく右腕を振るった。
「そんなこと言われても、どうしたらいいか判らないわよ」
「先刻のパスを出せ！」
「パス？」
ヒナギクは先程のカード入れみたいなものを取り出した。
「そしたらそれを開くんだ」
「開けばいいのね」
ヒナギクは言われた通りにライダーパスを展開した。すると、腰にベルトが出現した。
「セタッチだ！」
「せ、セタッチ？」
「パスをバックルに翳（かざ）すんだ！」
「こ、こうお？」
ヒナギクはライダーパスをベルトの中央にセットアンドタッチした。すると、白い光りに包まれ、仮面ライダー電王・プラットフォ

ームに変身した。
「何、電王だと！？」
驚きたじろぐクラストイマジン。だが、それより驚いているのは、電王自身だった。
「何なのよこれ！？」
「電王……、時の運行を護るライダーだ。さあ、やつを倒してくれ！」
電王はクラストイマジンを見詰めた。
「よく分かんないけど、あんたを倒さなきゃいけないみたいね」
電王は言うと、クラストイマジンに近付いた。
「へっ、ブランクに何が出来る？」
クラストイマジンは垂れを伸ばして電王を吹っ飛ばした。
「きゃあぁ――っ！」
宙を舞い、地面に落ちて転がる電王。
「てめえ、俺の契約者に何をする！？」
鬼形イマジンはそう言うと、クラストイマジンに接近。崩れて砂になった。
「お袋、イマジンの力を取り込んで！」
「と、取り込むって、どうすればいいのよ！？」
「赤いボタンを押すんだ！」
「赤いボタン？」
電王はバックルを改め、赤、青、黄色、紫の四つのボタンを見付けると、立ち上がって一番上の赤いボタンを押した。すると、列車が発車するときのメロディがベルトから発せられた。
「セタッチして！」
言われた通り、ライダーパスをバックルに翳す電王。
音楽が止まり、「Ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ」と、電子音声が鳴ってアーマーが出現し、それが電王の胴体に装着され、仮面の上に第二の仮面、デンカメンが現れて展開し、同時に鬼形イマジンが電王の体内に入り込んだ。

仮面ライダー電王・ソードフォームである。
「俺、参上！」
電王はそう言ってファイティングポーズを決めた。
「よっしゃあ、行くぜ！」
電王はベルトの両サイドにあるデンガッシャーをソード状に組み立ててクラストイマジンに襲い掛かった。
斬り付けたクラストイマジンの表面から火花が散る。
「貴様、我々の使命を忘れたのか！？」
「使命？　そんなもん端から覚えてねえよ。ていうか、こっちの方が面白そうだ。それに、俺はこう言うのがやりたくて来たんだ」
電王はそう言うと、ライダーパスをセタッチして投げ捨てた。
「Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ」
その電子音声と共に、剣先がデンガッシャーから外れる。
「必殺……、俺の必殺技、疾風の如く！」
そう言って電王はデンガッシャーを振り回してクラストイマジンを撃破した。
よし！――と、ガッツポーズを取る心。
電王はベルトを外し、変身を解除した。
「な、何とか倒したみたいね」
ヒナギクはそう口にすると、心の前に行ってライダーパスを差し出した。
「これはあなたに返すわ」
しかし、心はそれを受け取らず、首を左右に振るった。
「それはお袋のものだ」
「何でよ？　これ以上面倒ごとに巻き込まれるのは嫌だわ」
ヒナギクがそう言うと、眼鏡を掛け、髪に青のメッシュが入ったハヤテが口を開いた。
「だったら、僕がやるよ」
ハヤテはヒナギクから半ば強引にライダーパスを奪った。
「別にいいけど……って、あなた誰よ！？」

「まさかパパにもイマジンが憑いてる訳じゃないよな？」
その問いにハヤテは答える。
「そのまさかだよ、お嬢さん。ああ、因みに君のパパも特異点みたいだよ」
「何！？」
ちょっと待ってろ！――と、心は列車の中に入っていき、二つ目のライダーパスを調達して戻ってきた。
「ならば二人に電王をやって貰うか」
「何でそうなるのよ！？」
「お袋、歴史が変わって自分たちの時間が無くなってもいいのか？」
「それはよくないわ」
「じゃあ私と一緒に来てくれるな？」
「当然よ、人類の未来が掛かってるんだから」
そうよね？――と、ハヤテを見るヒナギク。
「そうです、そう彼が言ってるよ」
「よし、決まりだ。二人とも、デンライナーに乗ってくれ」
心がそう言ってデンライナーという列車に乗り込み、その後にヒナギクとハヤテが続いた。
中に入ると、二人は心に食堂車へ案内された。そこには、炒飯を食べている男と、実体化した赤い鬼形イマジンが居た。
「どうやら、僕は出た方が良さそうだね」
ハヤテがそう言うと、容姿が元に戻り、同時に中から青い亀形イマジンが出て来た。
「オーナー」と、心が炒飯を食べている男に言う。
「紹介します。こちら、特異点のお二人です」
オーナーと呼ばれる男は、炒飯を食べるのを中断すると、ハヤテとヒナギクの顔を見た。
「この時代の心くんのご両親ですか。しかも二人とも特異点。不思議なこともあるものですね」
オーナーはそう言うと、再び炒飯を食べ出した。

心は二人に向き直ると言った。
「この方は時の運行を護るこのデンライナーのオーナーだ。何か遭ったら彼に訊くといい」
そして――と、入り口横のカウンターを指し示す心。
ハヤテとヒナギクはその方を向いた。その先には、メイドが立っていた。
「ま、マリアさん！？」
「どうしてマリアさんが？」
二人の問いに、心が答えた。
「私の時代から連れてきた。実年齢はとっくに３０代を過ぎているが、見た目はかなり若い」
その時、マリアの投げた果物ナイフが心の真横ギリギリを通過し、後ろの扉に突き刺さった。
驚き、冷や汗を掻く心。
「あら、私としたことがついうっかり。それと、私はまだピッチピチの１９歳！　ですわ」
マリアはそう言うと微笑んだ。
ハヤテは小声でヒナギクに言った。
「（あれって、絶対本気ですよね）」
「（変なこと言わないように気を付けないといけないわね）」
「（そうですね。例えば、オバサン、とか）」
「何言ってんのよ、バカ！」
その時、マリアが投げた包丁が、ハヤテとヒナギクの顔の間を通って後ろの壁に突き刺さった。
「誰がオバサンですって？」
「「すみません、マリアさん」」
二人は同時に頭を下げた。
「（全く、何で私まで謝らなきゃいけないのよ！？）」
「（あなたがオバサンと言わせたんでしょ？）」
「ちょっと貴方たち？　学習能力低すぎですわよ」

その言葉に二人がマリアを見ると、塩水が飛来して目に入った。
「「うっ！」」
二人は同時に呻き声を上げて目を閉じた。
「うわっ、痛そう！」
そう言って心は、可哀想な者を見るような目で二人を見た。
「（マリアさん、一つ歳を取る度にやることが過激になってますね）」
「（１７の時は包丁を構えるだけだったのに、三十路を過ぎたら投げるのね）」
二人がそう言った時、マリアがカウンターを飛び越えて二人の前に着地し、二人の鳩尾を殴った。
「「うっ！」」
呻き声を上げてその場に崩れ落ちる二人。
「全く、貴方たちは何度言ったら解るのですか！？」
マリアはそう言って二人の背中を順番に踏み付けた。
「うげっ！」
「うげっ！」
順番に呻き声を上げる二人。
「二人とも、次はありませんからね」
「「い、イエッサー」」
二人はそう返事をして気を失った。

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ａｇａｉｎ．

（後書き）

関係者の皆様、度々申し訳ありません。お許し下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9664e/

【仮面ライダー】ハヤテのごとく！～俺、参上！～【電王】

2010年10月8日10時37分発行